

子宮腔容積測定による子宮内胎児の発育診断

国立西埼玉中央病院産婦人科

久保 惣 平

研究目的

子宮内胎児発育状態を診断し、子宮内胎児発育遅延の早期発見に努めるために、測定法が容易でしかもかなり有用と思われるGohariらの子宮腔容積の測定を行った。

研究方法

対象は昭和54年5月から昭和55年12月までの間に国立西埼玉中央病院で分娩した妊婦で双胎、羊水過多症、子宮筋腫などの合併症がなく、月経歴の順調なAFD児分娩をした正常妊婦102例と、SFD児分娩の既往のある妊婦、妊娠中毒症、心疾患などの合併症を有する妊婦あるいは子宮底長がM-1.5SD以下の低値を示した妊婦で2週間ないし4週間毎に子宮腔容積(TIUUV)を測定し得た110例である。

測定方法はGohariらによるLongitudinal scanによって子宮腔縦径Aを測定し、Transverse scanによって子宮腔横径Bと子宮腔前後径Cを測定し、各測定値と公式

$$TIUUV = \frac{4}{3} \times \pi \times \frac{A}{2} \times \frac{B}{2} \times \frac{C}{2} \quad \text{から TIUUV}$$

を算定した。

測定には三栄測器のultrasonic Tomograph 2H16を使用した。

研究結果

(1) 正常妊婦102例から得られたTIUUVのnomogramは図1に示す如くであり、平均値M±SDの間をNormal Zone、M-SDとM-1.5SDの間をGray Zone、M-1.5SD以下をAbnormal Zoneに分類した。

TIUUVは妊娠週数に従って増加を示し、妊娠30週頃よりAFDとSFDとの間に少し差がみられる様になり、妊娠36週以降Abnormal Zoneを示した症例ではほとんどがSFDであった。

(2) 妊娠33週以前に診断された早期診断例に

おけるSFDの発生頻度をTIUUV測定値の区別に比較すると表1の如くであり、Abnormal Zoneが17例あり、そのうち11例64.7%にSFD発生がみられ、かなり高い頻度を示した。

Gray Zoneは10例のうち3例30%がSFDであり、このZoneの症例も注意深い観察が必要と思われた。Normal Zoneは30例中3例10%がSFDであり、このZoneからのSFD発生は少い。

(3) 妊娠34週以降に診断された後期診断例のSFD発生頻度は表2に示されており、53例中Abnormal Zoneが20例あり、うち17例85%と高いSFD発生頻度が示され、妊娠9ヶ月以降TIUUVがAbnormal ZoneにあるもののSFD発生頻度は非常に高いことが示された。Gray Zoneは8例あり、うち2例25%がSFDであり、Normal Zoneは25例中4例16%がSFDであった。

(4) 最初に測定を行った時点から分娩直前までのTIUUV測定値の増加率はSFD群では1週間毎の平均が101mlであり、AFD群では150mlであった。

考 察

TIUUVは妊娠週数に従って増加を示し、児体重との相関もかなり高いが、胎児そのものの測定値ではなく、胎児の大きさを間接的に示すものであるため問題がないとは言えないが、測定が容易であり、実地臨床の場に有用と考えられる。

GohariらはAbnormal Zoneは全例SFDであり、Gray Zoneは30%のSFD発生がみられ、Normal Zoneからは1例のSFD発生もみられなかったと報告しており、我々の成績Abnormal Zone 75.6%、Gray Zone 27.7%、Normal Zone 12.7%のSFD発生頻度に比べてやや差がみとめられた。

早期診断例と後期診断例を比較すると、Gray

ZoneとNormal Zone においてはSFD発生頻度にそれ程差はみられないが、Abnormal Zone においては両者の間にかかなりの差がみられる。これは妊娠 34 週以降発育が促進される症例が少いためと考えられ、IUGRはできるかぎり早期に診断を行い、対策をたてる必要があると思

われた。

TIUVは妊娠週数に従って増加を示し、その測定値あるいは増加率からIUGRをかなり早期に診断可能と考えられる。

図 1.

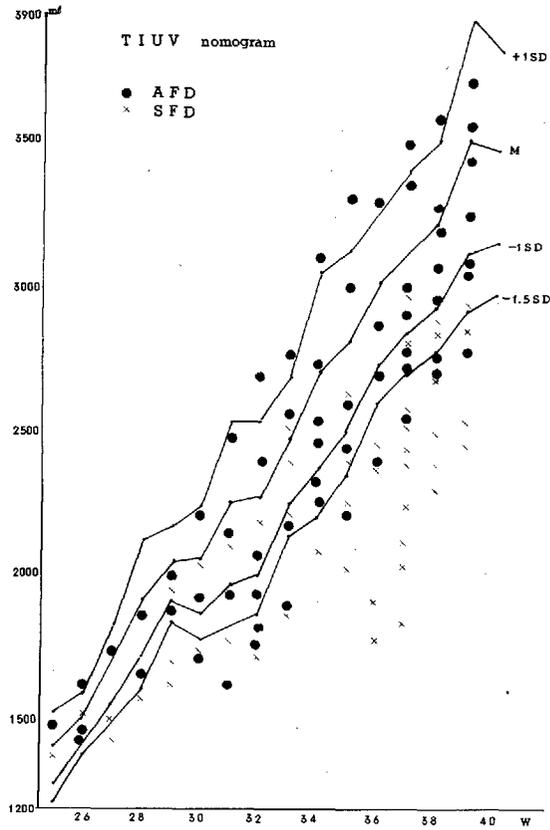


表 1.

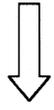
早期診断例のSFD発生頻度

	No.	SFD (発生率)
Abnormal Zone	17	11 (64.7%)
Gray Zone	10	3 (30.0%)
Normal Zone	30	3 (10.0%)
Total	57	17

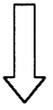
表 2.

後期診断例のSFD発生頻度

	No.	SFD (発生率)
Abnormal Zone	20	17 (85.0%)
Gray Zone	8	2 (25.0%)
Normal Zone	25	4 (16.0%)
Total	53	23



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

子宮内胎児発育状態を診断し、子宮内胎児発育遅延の早期発見に努めるために、測定法が容易でしかもかなり有用と思われる Gohari らの子宮腔容積の測定を行った。